

青森市の文化財 2

四ツ石遺跡調査概報

1965



青森市教育委員会



道路から発掘地域（北東）を望む

○ 序..	3
○ 四ツ石遺跡附近地形図..	4
○ 四ツ石遺跡発掘調査概報..	5
はじめ	
遺跡の位置	
発掘経過および土層	
出土品	
遺跡の性格	
おわりに	
○ 発掘調査地域平面図..	14
○ 出土品一覧..	15
○ 写真..	16
出土品..	16
土　器	
底部圧痕と土製品	
石　器	
耳飾及び装身具類	
出土状況..	26
発掘状況..	30
復原状況..	32
○ 四ツ石遺跡発掘参加者一覧..	33
○ 日　誌..	34

序

青森市教育委員会

教育長 神 守 夫

市の周辺に数多くある縄文遺跡のうち、都市のぼう張、発展に伴ない、何等の調査、記録も残されないまゝに滅失してしまったものがあるため、三内靈園遺跡の調査に引き続き、昭和38・39年の2ヶ年にわたって、横内四ツ石遺跡の発掘調査を実施した。

この調査に当って、青森市文化財審議会委員、市内高等学校の教諭、生徒の協力を得て、延16日間の調査を無事終えることができたことについて、深く感謝いたします。

郷土の歴史を明らかにするとともに、学術上の参考文献とする意図のもとに、さきに発行した三内靈園遺跡調査概報につぐ第2集として、この小冊子を刊行することになったが、第1集とともに讀者の用に供され、文化財への正しい理解と関心を深めることに役立てば幸いです。

なお、第2集の編集に、数回にわたって貿重な時間をさいていただいた委員の方々に厚く御礼申し上げます。



四ツ石遺跡発掘調査概報

«はじめに»

青森県は縄文遺跡の宝庫ともいわれるほど豊富な遺跡を有し、その発掘調査も各地でめざましい進み方を示している。ところがこのような状況の中で、津軽半島の数個所、および青森市周辺が発掘調査の盲点として取り残されたように見えはじめてきた。特に青森市周辺は最近宅地化が急速に進み、さらに道路工事や団地工事やらで次第にその様相を変えつつある。このような事情の下に、古くから著名な遺跡でありながら、正式に発掘調査を行うことなしに消滅してしまう恐れのあるものが増加している。

かねてから遺跡の消滅を心配していた青森市教育委員会では、著名な遺跡でありながら消滅の危険度の高いものから順次に発掘調査を実施することにし、その第一回として三内靈園遺跡の発掘を昭和36・37年に実施したのであった。この結果は調査概報が出版されているが、遺跡のあった場所は既に靈園の一部として墓地に編入され、往時をしのぶことすらできない現状である。

今回発掘調査のために選定した遺跡は、青森県では数多い縄文後期土器の包含地として知られている個所である。戦後耕地化が進み、また近くを青森市が建設している深沢環状道路が開通するようになって、乱掘の被害が増大し、このままでは遺跡が消滅することも考えられるので、青森市教育委員会では正式な発掘調査を実施することにし、青森市文化財審議会にはかかった結果、前回の三内靈園遺跡の時と同じく発掘担当者として、

青森市文化財審議会委員 小野忠明

同 脊倉弥八

同 井上久

以上の3名がその任に当ることになった。

はじめは昭和38年7月27日から31日までの5日間を発掘期間、引続いて8月1日から3日までの3日間を整理・復原の期間と定め、発掘作業は三内靈園遺跡発掘の経験を持っている県立青森高等学校・県立青森工業高等学校・市立第一高等学校・市立中央高等学校の郷土部または考古部関係のクラブ部員と指導教師にお願いすることにした。また青森市教育委員会事務局社会教育課では社会教育係長浅利健蔵を中心として、課長はじめ課員一同が事務手続の一切と雑用の処理とを担当することにした。

発端調査期間は晴天に恵まれたものの、北国には珍しいほどの酷暑が続き、また作業に当った高校生の人員が毎日増減したこと、さらに遺跡の中心部が確認できなかつたこと等の理由により、最終日に至って第二次発掘調査を翌年継続してとして5日間、現地にテントを張って合宿してくれたので不安を解消するこ

とができた。国学院大学文学部学生名久井文明君も、発掘に参加し、連日テント合宿に加わって調査に力を添えた。統いて8月1日から3日間、青森市教育委員会事務局で整理・復原を行ったが、出土した土器片が多量であったにもかかわらず復原可能のものがごく少数に止り、へら描き文様が多いのが注目された。

昭和39年には第二次調査が行われることに決定していたが、4月1日の人事異動の結果、青森市教育委員会事務局社会教育課では課員1名を残して、課長・係長はじめ全員が変った。このために事務的な面においては最初の内は少し不馴れの感じもあったが、新課長・新係長はじめ課員一同の努力のもとに第二次調査の準備が進められて行った。春以来数次の実地調査の結果、昭和38年度発掘トレンチの西側に遺跡の中心があるらしいと想定されるに至ったので、西側耕作地を借りて発掘調査を行うことにした。第一次と同じく昭和39年7月27日から31日までの5日間を発掘期間、引続いて8月1日から3日までの3日間を整理・復原の期間と定めた。

発掘担当者は第一次と同一の3名である。

発掘作業は前年度参加の4高校の外に、新しく県立青森商業高等学校・県立青森西高等学校・青森明の星高等学校の3高校が加わり合計7校の生徒がトレンチの中でひしめき合うという事態になった。また青森市教育委員会事務局では課長中村和夫・社会教育係長吉田行男他課員総動員で、事務手続き一切と雑用の処理から発掘作業・写真撮影までを受け持った。第二次調査が開始される直前までは冷害型の気候で、作業には適当な日和になると思われていたが、開始されてからは毎日気温が上昇する一方で、荒天には遇わなかったものの、暑さのためかなり作業に影響があった。発掘が進んでも住居址が確認できず、われわれの予想に反して包含層が薄く、耕作や乱掘のために層位が乱れていたため、遺跡の中心すら掴めずに調査を終るのではないかと懸念されたが、第3日目の正午に至って西北端Cbトレンチ壁側に直径13cm・長さ36cmの立石が出土し、さらにその周囲から一定の間隔をもった石群が出土するに及んで、本遺跡の性格が次第にはっきりしてきた。つまり当遺跡は配石遺構を中心とした祭祀的遺跡なのであって、そのために住居址が存在しないのである。昭和38年度と同じように市立第一高等学校考古部員が指導教師山口義昭を中心にテント合宿して発掘作業に当たったこと、陸上自衛隊第九師団隊員水田政雄（第一高校OB）・立川仁三の両氏が発掘に参加して、力を添えたことを特記したい。

以下に二次にわたって行われた発掘の概要を述べる。

«遺跡の位置»

本遺跡の位置は青森市大字四ツ石字里見の三浦正嘉氏所有の耕地内にある。旧横内村の本村から東に折れ四ツ石橋を渡るとまもなく大字四ツ石に入って、今度は南に折れて人家を過ぎると稻荷神社があり、長い上り坂の農道をたどって行くと左側にりんご畠と耕作畠地が続き、やがて本遺跡に達する。右側に折れる林道が目じるしになるだけで、特に目標らしいものもない。この農道をさらに上って行くと田茂木野を経て、八甲田山腹の田代平に達するという。農道は尾根を通っていて東側は本遺跡がある耕地が傾斜して下って行き、小沢に到る。西側は林地を経て小川に

到る。東側の小沢は北西に流れ、やがて西側の小川に合流して四ツ石橋の下を通って荒川へ注いでいる。つまり荒川の支流が四ツ石を過ぎてさらに二つの細流となって本遺跡がある丘陵の東西を流れているのだ。

丘陵を北から南へと尾根伝いに農道が上りながら通じ、本遺跡はその東側の傾斜面にあるので、冬の強い季節風はある程度防げるかもしれない。また東側へさらに下って行くと小沢があり、飲料水にも困らなかったかもしれない。しかし北側が開け、南側に八甲田連峰を背負っているこの丘陵は、数々の遺物を残した人々が生存していた時代は、すぐ下まで陸奥湾が迫っていたと考えられ、北からの強い海風を防ぐ術があったのであろうか。標高50mの本遺跡において、発掘作業中しばしば記録の手を休めてはこれらの文化遺物を残した人々の上に思いをはせるのだった。しかし青森市周辺は土地が酸性のためか、先史時代の人骨の発見もなく、貝塚も確認されていないので、彼等の末路ははっきりしない。はっきりいえることは、現在のわれわれの生活とは、かなり異った生活を営んでいたということである。

本遺跡は大字四ツ石字里見にあるので、字名をとれば里見遺跡というのが正式なのかもしれないが、通称四ツ石遺跡と呼びならわされているので、われわれも通称を採用して四ツ石遺跡と命名することにした。この丘陵は地表採集によても、各所から円筒上層式から後期末に至る縄文土器片を検出できるので、丘陵全体にかなりの包含地が散在しているものと思われる。今回の発掘地点が、配石遺構を伴う祭祀的遺跡だとすれば、住居址を伴う遺跡も当然近くに存在することが考えられるが、住居址を確認することはできなかった。

«発掘経過および土層»

昭和38年度の第一次調査では試掘の結果、農道から本遺跡のある畑地を東側の小沢に通ずるあぜ道に沿って、西から東へ2m×16mトレンチを一本設定し、Bトレンチとした。発掘の進み具合や出土品の多少によって、南側へもう一本のトレンチ設定を予期したため、後者をAトレンチとする予定からであった。そして記録の便宜や作業の都合上、Bトレンチを2m×2mずつの小区に細分し、CからJに至る八つの枝番号を付した。この八つの小区を各学校に配分して作業を進めて行ったが、東側のi・j区は全く出土品がない状態で一日半で洪積粘土層に達したので、二日目午後からはcからhまでの六区の発掘と、さらにcから西に2m×4mトレンチを延長して、これをb・aと細分してi・j区を終った生徒を当てた。三日目正午でg・h区も粘土層に達し出土品の整理も一通り終ったので、午後からbの南側に接続して2平方mの小区を設定してg・hを終った生徒をこれに当てた。これがAbトレンチである。四日目はさらにAbを東に2m延長しBcと併設してAcとした。最終日は午前中でBトレンチはaからfまで六区、Aトレンチはbとcと二区の発掘を終え、午後は埋めもどしと整理に当てた。五日間を通じて、石匕や石斧等の日用品の出土が少く、また炭化物や焼土および薄い灰層の存在は確認されたが柱跡は全くなく、住居址は確認することができなかった。Bトレンチの南側のAトレンチよりも、北側のやや傾斜して低くなっている畑地に遺跡の中心があると想定されるところから、昭和39年

度はBトレンチの北側を発掘することにして第一次調査を終了した。

昭和39年度の第二次調査は、昨年度のBトレンチの北側あぜ道をつぶして2m×10mのC、さらにその北に同一の大Dトレンチを設定し、これを2m×2mずつの小区に細分して、Bトレンチに用いたbからfまでの枝番号を付して作業を開始した。作業人員が多かったので、f区を北に2m×6m延長し、Ef・Ff・Gとした。第二日目はFfを西に2m×8m延長してbからeまでの小区に細分した。またDトレンチの東側に2m×2mの飛地を設定し、Dhとした。三日目はEfを2m×8m延長してbからeまでに細分し、DhとDfとを結んでDgを設定し、これと併行してCを2m×4m延長してCg・Chを設定した。四日目はGfを西に2m×8m延長してbからeまでの四区を設定した。これで第二次調査の面積は116平方mに達した。第一次調査の面積である48平方mと合すると総面積164平方mを発掘したのである。

北側に行くに従って包含層が薄くなり、粘土層に達したので、五日目午前中はCトレンチのbからhまでの全区およびDトレンチのe・f区を粘土層まで発掘調査し、午後は埋めもどしと整理とに当たった。これで全調査を終ることになった。測量は県立青森工業高校の生徒数名が実習を兼ねてこれに当り、肴倉弥八委員が監督に当った。

発掘作業が一段落する毎に土層の実測を行ったが、C・Dトレンチの西壁では表土が40cmから20cm、黒色土層（包含第I層）が17cmから16cm、褐色土層（包含第II層）が28cmから15cmと北側が薄くなり、土黄色砂質層が10cmで粘土層に達する。土黄色砂質層以下は遺物を全く包含していない。また包含層はE・F・Gと北に進むにつれて薄くなり、Gの北端では表土から土黄色砂質層までわずかに40cmよりもなく、しかもその半分まで耕作の影響を受けていた。これは洪積台地の上に南から北へと冲積土層が流れて堆積したためと思われる。Cトレンチの南壁（写真1）では表土が40cm、焼土10cm、黒色土層（包含第I層）が23cm、褐色土層（包含第II層）が40cmで土黄色砂質層に達していて、包含第I層に土器類が集中的に包含されているのが認められた。三内靈園遺跡では、沖積土層の中間に八甲田山形成期のものと推定される火山灰の堆積が見られたが、本道跡では人工的灰層は各所に薄く認められたが、火山灰の堆積は全く認められなかった。

Dbで発見された立石を中心とする配石遺構、Dc出土の青竜刀型石器、Fb出土の巨大な石棒、Dg北壁から出土した土偶の顔や足、極小型土器等は本遺跡の特殊な性格を物語るものとして注目された。



写真 1

«出土品»

本遺跡の出土品については、現在までに整理の終ったものを一覧表にし別掲してあるので、以下には各種別毎に特殊なものや本遺跡の性格を示すと思われるものについて述べる。

1. 土 器

土器は後期に属するもので、下層から上層へ3種類に大別できる。

第I類は最下層出土のもので、斜格子文または網代(あじろ)文の目が荒い大型深鉢の破片が発見されたが、破片が少くて復原できなかった。黒褐色である。

第II類は中層出土のもので、磨消繩文のほどこされた一群を総称する。器型は小型の台付が多いが、大型つばの口縁部も出土している。赤褐色が主流をなしている。大型つばは天間林村櫻林貝塚出土のものと文様が類似している。

第III類は最上層出土のもので、へら描きの沈線文様がほどこされ、土褐色が主流をなしている。器型は小型の台付および大小のつぼ型があって、鳴沢式・大湯式との類似が感じられる。土器蓋(後述)も出土しているが、第III類土器に併出するものらしい。朱塗りのものもある。

以上のように一応の分類を試みたが、第II類の時代に第I類を、第III類の時代に第II類・第I類をそれぞれ攪乱したと思われる個所も多く、第I類から第III類まで混りあって出土した個所では、更に無文土器も出土しているが、これは層位的に明確でないので、分類できなかった。また第II・III類はさらに細分できそうであるが、整理がそこまで進んでいない。

なお、Ee区から荒い格子の隆起した粘土帯と繩文とがほどこされた土器片が一群、土黄色砂層に食いこんで出土しているが、これは円筒上層(中期)の終末期の土器と考えられる。これが確実であれば、本遺跡は中期末の上に営まれた後期の祭祀遺跡で、かなり長年月に涉って営まれたが、後代の人達が前代の遺跡の上に生活を営んだ関係上、攪乱が多くなり、層位が不明確な個所も多くなつたものといえよう。

2. 土製品

a. 土器蓋



写真 2

上述した第III類土器に使用したものと考えられる。Bb区出土のもの(写真2)は直径18cm(推定)の大型で、沈線文様がほどこしており、中央のつまみ(紐)には紐を通す穴が3個ある。小型の紐つきのもの(写真3)もある。きのこ状土器と称される土製品も多数出土しているが(写真4)、これも土器蓋の一種と思われる

b. 土偶

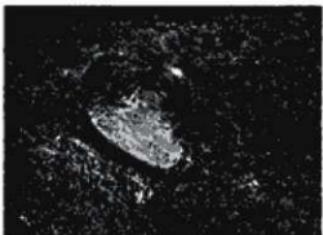


写真 3

さるの顔を思わせるような小型板状の頭部1個および脚部が6個出土している。脚部の1個は折り曲げた恰好をしており、福島県飯坂町東湯野出土の土偶脚部に類似している。胴体部は破片すら見当らなかった。

赤褐色で小型長三角形の装身具が出土している、首飾りに使用したらしく糸を通す穴があるが、これは土偶を簡略化したものと考えられる。

c. 装身具

小型で有孔の円形または四角形の装身具がかなり出土している。首飾りが懸吊用であろう。

d. 耳飾・耳栓(写真5)

小型の鼓状のものを耳飾として分類したが、これは耳栓というものが正確かもしれない。朱塗りのものもある。

e. 祭祀用品

竹筒を模したような長筒土器、高さ3~4cmの小型土器、いちじくの実を思わせる有孔つまみつきの鐸状土器、直径3cm前後の円型土板、これらは用途不明で祭祀に用いられたのではないかと推察される。

3. 石器

a. 青竜刀型石器

縄文後期から晩期にわたり、東北地方の遺跡に特有なものといわれる。全国的にみても数少い。偶然発見されたという例が多く、本品のように正式に発掘された例は珍しい。

刃部に突起があり、柄部が欠損しているが、生産がごく少いためか、柄部とつないで使用したらしく、接続用の穴が3個あった。

b. 石刀

上部が少し欠損しているが、石刀ということが一見してわかる。黒色である。

c. 三角形岩板

一边の長さが4cm前後で、一面がやや平らで他面は中央部がふくらんでいる。各辺は薄くなっ

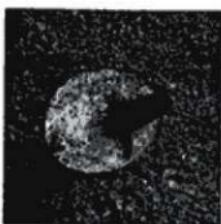


写真 4

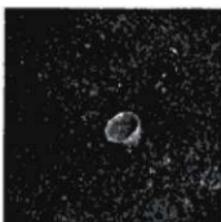


写真 5

て刃のようになっているものもある。無文が多いが、沈線文様がほどこされたものもあり、第Ⅲ類土器の文様と類似している。用途は全く不明であるが、小型長三角形土偶が出土しているので、岩偶が簡略化されたものではないかと推察されるが、確証はない。

d. 球状石製品

直径約4cm黄白色砂岩で作られた球状石製品が2個出土している。1個には沈線文様が、他の1個には石錘として使用するように刻みが入れられているが、水洗いしても表面が融けるような軟質砂岩製なので、実用的なものとは考えられない。

e. 石 棒

高さ44cmの巨大なものと、6cmの小型のものとがある。小型のものは一部を欠いているが、明らかに男根を摸したもので、祭祀用のものと思う。

f. 小型石皿

3cmに5.5cm流（現存部）の超小型石皿で、一部欠損している。あまりにも小さく、実用としてよりは装飾用かあるいは祭祀用としての意味で作ったものとしか考えられない。

4. その他

a. 深鉢型土器底部

一般に発掘調査の際、一ぱん多く出土して人目を引くのは土器底部であろう。この意味からいえば、特に珍しい出土品ではない。しかもわれわれがこの中の2個を写真版として残したのは、施された文様があまりにも明瞭だったからである。大型の底部にはアンペラ状の文様が・小型のには広葉樹の葉脈がはっきり刻みこまれていたのである。

深鉢型土器の製法は輪積みによるものと堆定されているが、その際に底部が台に粘着しないようにするために、色々なものを台上に敷いたらしい。敷いたもの自体は土器を焼成する時に姿を失うのであるが、その痕跡は文様として残っている。またこの時代に・根曲り竹か篠竹を用いてアンペラ状の敷物を作っていたことも知られる。

b. 石 锤

石錘は漁獲に際して、網を張るときのおもりとして使用されたものと考えられている。したがって石錘が出土したということは、この時代、網を使用した漁獲が行われていたと考えてもよい。残念なことに貝塚がなく、骨類の保存が悪く、獸骨も魚骨も骨角器も遂に発見できなかった。石錘は完全なもの3個を記録しておいたが、不完全ながら石錘ではないかと推定されるものが数個出土している。

c. 凹 石

凹んだ部分に木の皮その他燃えやすいものを詰め、棒の先をあてがって両手で棒を回転させ、摩擦熱で発火させるのに用いたといわれるが、確實性に乏しく、また出土数が多すぎる。完全なもの2個を記録しておいたが、石皿残片や石錘およびすり石にまで凹みをつけているので、これらも加えるとかなりの数に達する。

d. 炭化物

木炭と炭化くるみとをそれぞれ若干ずつ出土している。これによってくるみを常食にしていたことが推定された。どんぐりも野生していたであろうし、これも食用に供されたとは思われるが、痕跡がないので確実なことはいえない。

遺跡の性格

本遺跡の第二次調査も半ば終ろうとしていた時、CトレンチのCb区西側壁面近くから立石が発見され、さらにその周囲から一定の間隔をもった石群が出土したことは前述した通りである。古くはストン・サークルと呼称され、現在では配石遺構と総称されているこの種の石群を伴った遺跡は、多分に祭祀的意味を持つものとされている。したがって、この四ツ石遺跡も、配石遺構を伴った祭祀的遺跡であると推定しても、たいした過ちではないとわれわれは結論づけた。祭祀的遺跡には住居址が伴わないのが普通であるという。本遺跡から1個の柱穴をも発見できなかつたのも当然のことだったかもしれない。

おそらく本遺跡は縄文中期の終末期である円筒上層式に統くもので、縄文後期全期を通じて営まれた祭祀的遺跡で、後期の終末近くにその営みを終つたものであろう。このことは、出土品の項の土器の分類で前述した通りである。しかし、長年月に涉って営まれた遺跡であるがために、現代人の耕作や乱掘による被害のほかに、縄文後期人もまた後代の人たちは前代の遺跡を知ら知らずに搅乱してしまつたらしく、層位が混乱してしまつた箇所も少なくなく、われわれの推定の障害となつた。層位のはつきりしている所でセクションを実測でき、また土器形式を3種類に分けることによって時代を推定できたことは不幸中の幸いともいいくべきであろうか。

土器にても、残片の出土量が多かったにもかかわらず完型品または復原可能品がごく少く、しかもその大半が中型以下の台つきのものであったこと、きのこ状土製品・土偶・装身具・耳栓・長筒土器・錘状土器・円型土板・超小型土器類等、祭祀用品と考えられる遺物が雑然と出土しているのも本遺跡の性格を暗示しているようである。

石器もまた超小型石斧や石皿・三角形岩板・球状石器・青竜刀型石器・石刀・石棒等の出土品はどうしても実用品とは考え難く、これに反して日常の実用品と考えられる石匕・刃器等の利器は予想を下廻る出土量であった。石鎚は割合に多く出土しているが、これも円型土板や耳栓等と伴出している状況からみて、実用に供したものかどうか疑わしい。

以上のように種々の点から考察して、本遺跡は祭祀的性格を持った縄文後期の遺跡であつて、かなり長年月に涉って営まれたものであるという推定に達した。しかし、祭祀的性格を示す最大のキー・ポイントともいべき配石遺構も、秋田の大湯とは比較にならないほど小規模なものであるし、陸奥湾沿岸の配石遺構を伴う遺跡の発掘が行われていない現在では、同種遺跡の比較研究も行い難いので、断定は避けたいと思う。東津輕郡三厩村所在の算用師遺跡は、広大な配石遺構を伴う縄文後期の遺跡として著名なのであるが、正式の発掘調査を行うことなしに、長年月に

涉る耕作と乱掘によって消滅寸前の状態にある。このような場所を発掘調査して本遺跡と比較研究することができたら、もう少しあは性格も明確になると考えられるが、実現できそうにもない現状を残念に思う。

おわりに

四ツ石遺跡は昭和38年夏と昭和39年夏とにかくて、通算16日間に涉って発掘調査ならびに出土遺物の整理を行った。発堀総面積 164平方mに及ぶ遺跡調査も、この概報の刊行で一応の終結を見る事になる。

本調査でわれわれは多くの収穫をおさめたと同時に、数々の疑問とも遭遇した。その概略は上述の通りであるが、以下にこれを整理しておわりとしたい。

第一に最初からわれわれを苦しめたのは、層位の搅乱という事実であった。耕作や乱掘による被害は考慮に入れてはいたがかなり下層まで搅乱されていようとは予想もしていなかった。この事実から、われわれは本遺跡がかなり長年月に涉って営まれ、その間に後代の人達が前代のものを搅乱した結果生じた現象であると考えた。第二に出土遺物は雖然としていて実用的なものが少く、比較的浅い層からの出土が多かった。第三に発掘が進むにつれて各所に焼土や人工灰層が発見されたが、炉址らしいものは確認されなかつた。第四に住居址を証明すべきものは、柱穴1個すら確認できなかつた。第五に小規模ではあるが配石遺構が発見され、祭祀的遺跡であることが推定され、第二・第三・第四の疑問は、住居用の遺跡ではないので、そのような現象を生じたのであるという一応の結論をみた。しかし類似遺跡の発掘調査が進んでいない現状では、早急な断定は避け、本遺跡の性格に対するはっきりした結論は将来に残したい。

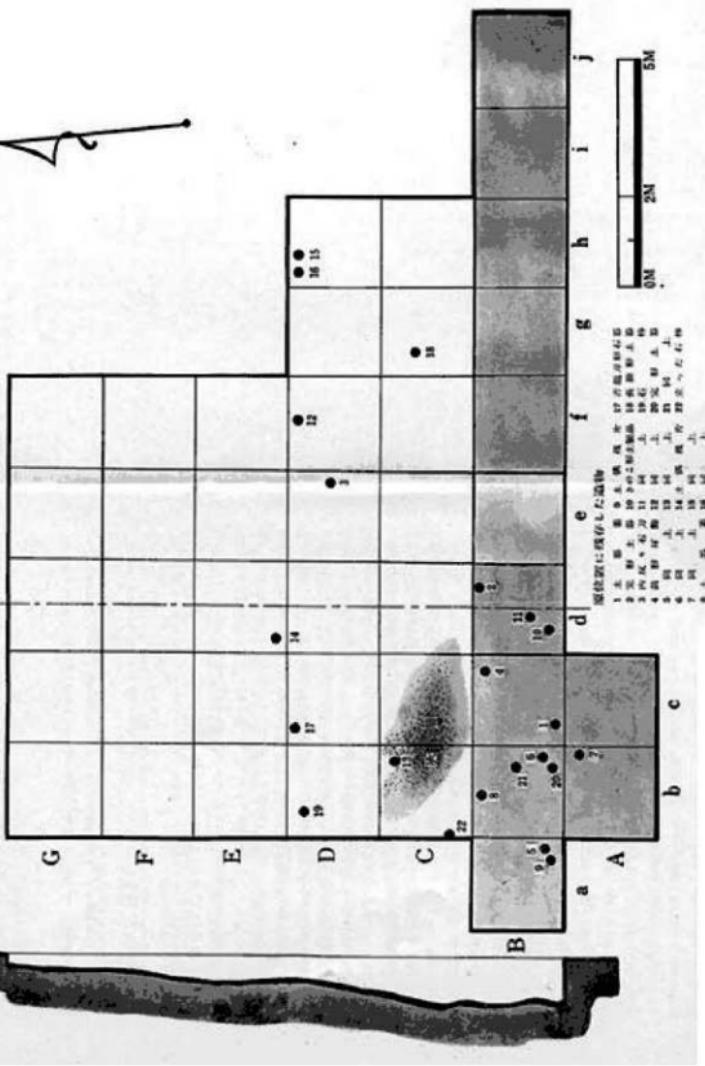
最後に今回の発掘調査に際して、多くの人達の援助・激励を受けた。炎熱の最中を夏期休暇中にもかかわらず発掘を続けた高校生やその先輩諸氏、遠い道のりをわざわざ来訪してくださった諸氏の氏名は別表に記載して、長く感謝の意を表したいと思う。

付記

この概報の編集は発掘担当者3名と山口義昭（青森市立第一高等学校）および青森市教育委員会事務局社会教育課長と係職員がこれに当つた。使用した写真はすべて山口義昭の撮影によるものである。なお発掘担当者の分担は次の通りである。

總務、発掘指導、図面、拓本作成
小野忠明
涉外、測量指導
肴倉弥八
記録、カラー写真撮影、本文執筆
井上久

発掘調査地域平面図



出土品一覧

(1) 縄文式後期土器

	深鉢型	6
完型(復原)土器	台つき	10
	つぼ型	3
深鉢型土器底部(文様あり)		1
長筒土器		1
小型土器		5
錐状土器		4
土器残片		多量

(2) 土 品

土器ぶた	大型沈線文様	1
	小型無文	2
きのこ状土製品		4
土偶	頭部	1
	脚部(曲折)	1
	脚部(直立)	5
	小型長三角形	3
装耳身具		17
円型耳具	栓	4
器	土版	18

(3) 石

石鏃	有柄	35
	無柄	27
磨製石	斧	15
同小型石	斧	6
搔刃尖頭	器	1
石石	器具	19
石匕	誰	11
延石皿型石	型石	1
小型岩版	片皿	6
三角形岩版		5
青竜刀型石器刃部		5
球状石製品		6
石刀	片	3
石棒	大型	1
	小型	1
装石身	型具	1
石凹すり	鍾石	3
	石	2
	石	2

(4) その他

加工孔状化	軽石	1
有環木炭	岩土	1
状化く	器	1
すりる	炭み	小量

出土品 土 器



高さ 18cm

出土品　　土　　器

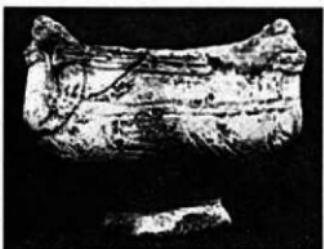


高さ　10cm



高さ　11cm

出土品 土 器



高さ 9cm



高さ 9cm



高さ 14cm



高さ 13cm



高さ 9.5cm



高さ 11cm

出土品 土 器



高さ 17.5cm



高さ 13.5cm



高さ 6cm



高さ 7.5cm



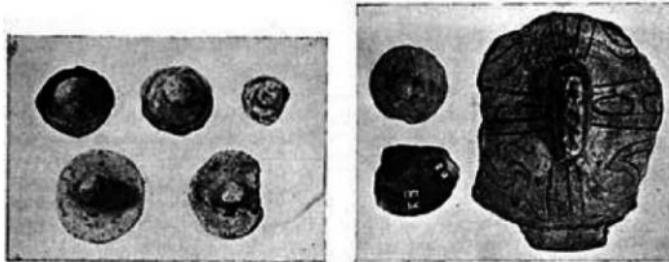
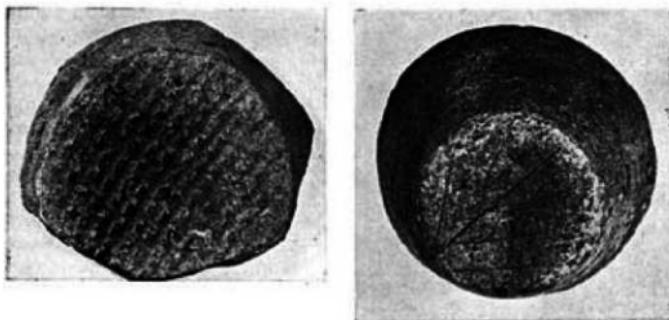
高さ 6.5cm



高さ 10cm

出土品

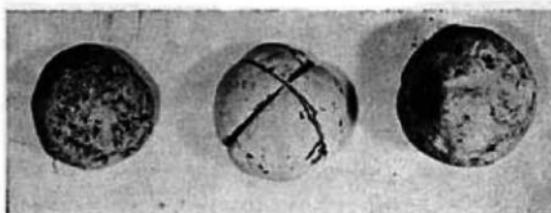
底部压痕と土製品



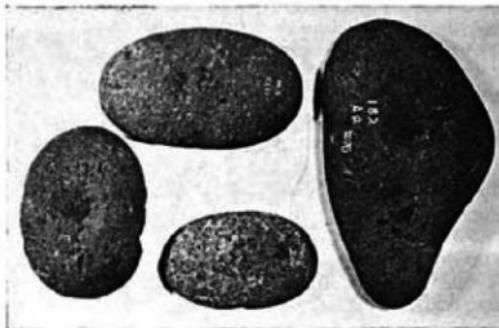
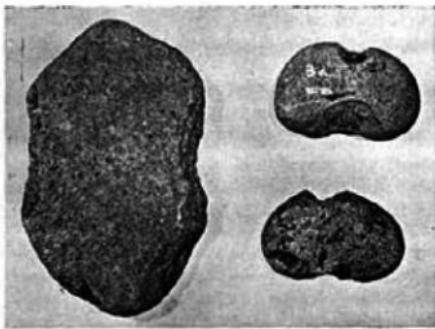
出土品 石 器



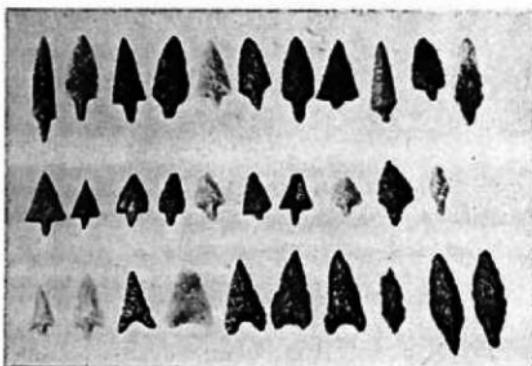
出土品 石 器



出土品 石 器

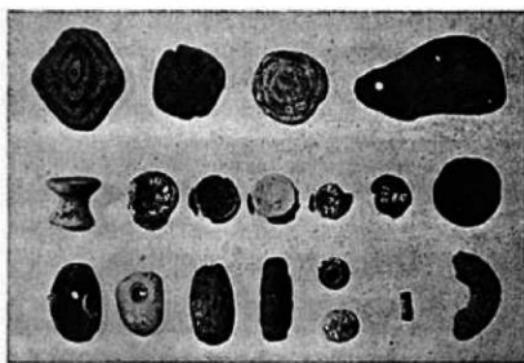


出土品 石器



出土品

耳飾りおよび装身具類



出土状况

配石遺構



出土状况

出土第Ⅱ層



出土第Ⅰ層



出土第Ⅰ層



出土第Ⅰ層



出土状况



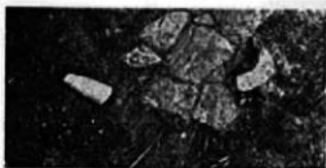
青龍刀型石器



最下層出土土器片



石 刀

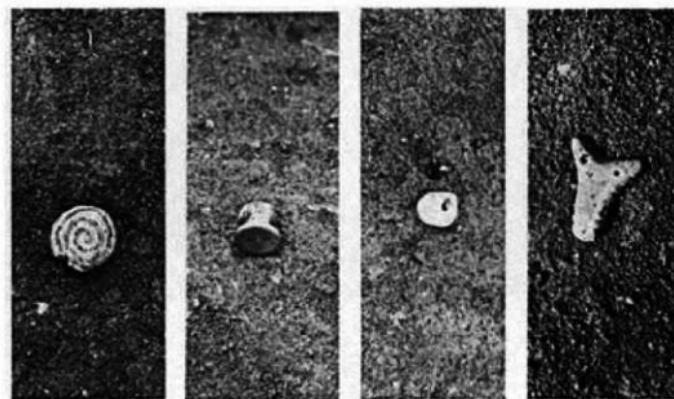
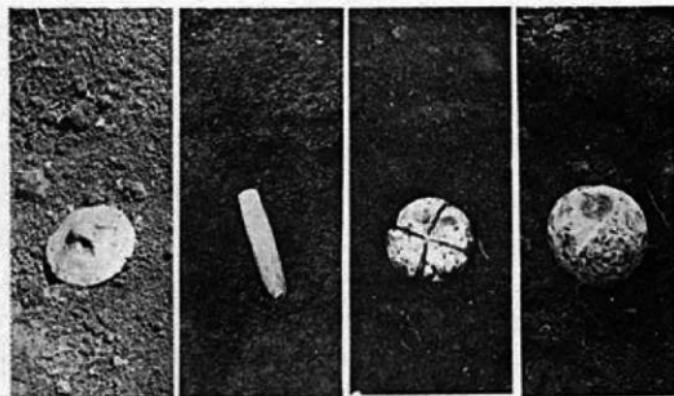


石 棒



土 器 蓋

出土状況



发掘状况



発掘状況



復原狀況



四ツ石遺跡発掘参加者一覧

昭和38年度

○発掘担当者	市文化財審議会委員	小井 看	野上 倉	忠 弥	明久 八
	ク ク				

○発掘参加者

市内高等学校

校名	教諭	生徒代表	人員
青森高校	宮川 隆英	中川 秀夫	7
工業高校	佐藤 秀利	田竜 太郎	11
第一高校	山口 昭久	野武 志子	9
中央高校	井上 小説	田洋 梓	11

国学院大学
市教委事務局

名久井 文助
渡辺 健三
浅寺 錦郎
寺澤 鮎人
福士 幸平
福岡 五十嵐
田嶽 八郎

昭和39年度

○発掘担当者	市文化財審議会委員	小井 看	野上 倉	忠 弥	明久 八
	ク ク				

○発掘参加者

市内高等学校

校名	教諭	生徒代表	人員
青森高校	宮川 隆英	千葉 葵子	15
青森西高校	竹内 雅之	佐藤 信民	8
工業高校	馬村 雄二	林雄一	14
中央高校	井上 久雅	藤原 明ナ	10
明の星高校	野口 忠義	木下 孝子	8
第一高校	小山 昭義	川口 文明	11
商業高校			4

陸上自衛隊第9師団

市教委事務局

水立 雄三
立中 中吉
中寺 寿
吉澤 佐々
川田 仁
田村 行和
川田 沢
寺昭
澤直
藤木 一

日 誌

昭和38年度

月	日	曜	内 容	備 考
4	21	日	第3回埋蔵文化財発掘のため四ヶ石地区遺跡の調査を行う。	文審委員、事務局職員
6	11	火	四ヶ石地区埋蔵文化財発掘の進め方について検討する。	担当者、学校職員、事務局職員
6	19	水	四ヶ石地区埋蔵文化財発掘について具体的に話し合いする。	担当者、学生代表、事務局職員
7	24	水	文化財保護委員会より四ヶ石地区埋蔵文化財発掘承諾の通知あり。	保護委員会
7	25	木	発掘場所に休憩所、その他設営、(用具運搬)	事務局職員
7	27	土	発掘実施第一日目始まる。	担当者、生徒、事務局職員
7	28	日	発掘実施第二日目	〃
7	29	月	発掘実施第三日目	〃
7	30	火	発掘実施第四日目	〃
7	31	水	発掘実施第五日目最終日となる。	〃
8	1	木	整理復原第一日目始まる。	〃
8	2	金	整理復原第二日目	〃
8	3	土	整理復原第三日目最終日となる。	〃
9	8	日	四ヶ石地区埋蔵文化財出土品を再び整理復原する。	〃
9	13	金	文化財審議会に埋蔵文化財発掘状況報告する。	
10	〃	金	四ヶ石遺跡調査報告作成のため写真、印刷、内容等を検討する。	担当者、事務局職員

昭和39年度

月	日	曜	内 容	備 考
4	23	木	昭和39年度、埋蔵文化財発掘場所について審議を行う。	文 審 委 員
5	10	日	第4回埋蔵文化財発掘のため四ヶ石地区遺跡の調査を行う。	文 審 委 員、事 務 局 員
6	15	月	埋蔵文化財の発掘方法について審議を行う。	文 審 委 員
〃	19	金	埋蔵文化財発掘の進め方について検討する。	参加教職員、生徒代表、事務局
7	10	金	埋蔵文化財発掘方法について具体的に審議する。	文 審 委 員
〃	21	火	文化財保護委員会より四ヶ石地区埋蔵文化財発掘承認の通知あり。	保 護 委 員 会
〃	22	水	参加生徒全員に対して発掘についての事前指導を行う。	生 徒
〃	25	土	発掘場所に休息所その他設営(用具運搬)	事 務 局 員
〃	27	月	発掘実施第一日目始まる。	担当者、生徒、事務局員
〃	28	火	発掘実施第二日目	〃
〃	29	水	発掘実施第三日目	〃
〃	30	木	発掘実施第四日目	〃
〃	31	金	発掘実施第五日目最終日となる。	〃
8	1	土	整理復原第一日目始まる。	〃
〃	2	日	整理復原第二日目	〃
〃	3	月	整理復原第三日目最終日となる。	〃
9	11	金	文化財審議会に埋蔵文化財発掘状況報告する。	
〃	12	土	埋蔵文化財発掘反省会	担当者、生徒、事務局員
12	22	火	四ヶ石遺跡調査概報作成打合せ会	担 当 者、事 務 局 員
1	16	土	〃	〃
1	23	土	〃	〃
3	20	土	〃	〃
3	31	水	四ヶ石遺跡調査概報印刷発行	

青森市の文化財 2

四ツ石遺跡調査概報

昭和 40 年 3 月 31 日

発行所 青森市教育委員会

印刷所 K.K. 誠工所